

湯治

中西祐介

七人掛けの円卓にひとり  
朝食を摂る

大きなテーブルひとりで使うと

大富豪にでもなった気分だ

白いお米とみそ汁とその他の和食を減らしてゆくのだ

噛む回数を数えながら

あっちやそっちの机では

夫婦や家族が団欒を持参

私は観光という仕事をしに来たのではない

湯治をしに来たのだ

アーレントのワークから離れて

お湯が私を詩人にしてゆく

BGMの細やかなボサノヴァが鬱陶しく

お米の味をトーストにしてゆく

ふとボサノヴァが鳴き止んで

白米の味が戻ってくるのだ

左側の円卓では家族が三人今日のスケジュールについて揉めており

右側の円卓では男の子がじらをくって朝食を減らすのを拒む

前方の円卓では奥さんが朝食を用意しなくていい現実に戸惑う

咀嚼の回数だけやってくる冷水を

みそ汁に入れすぎたワカメでごまかす

私は湯治をしに来たのだ

ドレッシングをかけないサラダの麓に

塩サバを隠したままだ

ヨーグルトにはブルーベリージャムで

ぬるいお茶とは合わなかった

「違うそっちゃ」

古い友人の口癖が

帰って来たボサノヴァと共に帰宅して

傷を癒した白狐のように

孤独も孤立も癒したかった

「違うそつちや」

確かに何か

「違うそつちや」

いや　これで良い　という気も　するん　です　よね

傷を癒した狐がなぜか

高貴で気高くあつたであろうと

浴衣に尻尾をはやした誰かと

湯治のさなかにすれ違うのだ